

# 館山支部だより Vol.108

<支部連絡窓口>  
千葉県隊友会館山支部  
事務局(代表)川村 巖  
〒294-0032 館山市笠名1357  
TEL 0470-22-0230



雪中花とも呼ばれる水仙  
<1月中旬 社宅の庭先に>

2022年の新春を迎え 謹んでお慶びを申し上げます。  
3年目に入ったコロナ禍ですが、年明け以降の感染拡大状況はまさに異常と言えましょう。新しく登場したオミクロン株については未知なことが多いようですが、専門家等が指摘する「空気感染」については、予防対策面で大いに関係すると言われておりますのでその方面の情報収集とともに日常の対策に結び付けることが大切だと思います。コロナ禍の一日も早い終息を祈ってやみません。

<川村 記>

## 支部の活動概要

### 《12・1月活動実績》

- 1. 11(火) 第21航空群司令年始表敬挨拶  
(コロナの感染拡大状況に鑑み中止、OB3団体代表)
- 1.29(土) 1月支部役員会(別法)

### 《2・3月活動予定》

- 3. 3(木) 県隊友会後期支部長等会議(千葉市市民会館)
- 3.21(火) 館山市戦没者慰霊祭(鶴ヶ谷八幡宮)
- 3.26(土) 年度末支部役員会(コミセン)

## 自衛隊広報にひと役「災害支援写真展」 渚の駅たてやま 1/21~30

「教えてもっと自衛隊の会(後述)」企画の「自衛隊災害支援活動写真展」が催され、令和元年の台風15号による災害時の支援活動を中心に紹介されておりますが、市災害対策本部で活動する基地隊員等今まで報道されなかった活動状況なども展示されております。  
冒頭の市民有志の会は、海上自衛隊館山航空基地を核とした地域の活性化を図ることを目的として2021. 4月に発足した団体で、三沢智県議を会長に約30名の会員で構成され、相談役として浜田靖一代議士や金丸謙一市長らが名を連ねております。  
今回の催しは、自衛隊の活動を広く市民に周知してもらうことを目的にしたもので、自衛隊と直接関係のない第三者が行う催しとして、自衛隊の広報への貢献は大きなものがあると思います。 <川村記>

### “OBが手がける自衛隊広報”について

「広報」と言えば広報室の専属業務と思われがちですが、部隊は訓練・諸行事等の中で常に「広報」を意識し、任務の完遂とともに国民に防衛・自衛隊を正しく理解・認識してもらうため懸命の努力を積み重ねているのです。  
隊友会は、事業活動の重点として「(国民・市民に対する)防衛意識の普及高揚」を掲げておりますが、支部としてもこの趣旨に沿った活動に心がけております。一例として(現在、コロナ禍等で低調ですが)、市民講座や団体等への講話、地元紙、ホームページ等への投稿等を通じて一般の人々の防衛・自衛隊に対する理解を深めることを期待し、これが「OBが手がける自衛隊広報」にほかならないと考えております。  
我々は長年の自衛隊勤務を通じて一般の人にはできないことを知得、体得しているのです。このような”強み”を諸活動に活かさない(活用しない)という手はないと思っております。

<支部長>

## レクイエム

- 12/10 村上 半治会員(享年88歳) ご逝去
- 12/30 竹田 富夫会員(享年89歳) ご逝去
- 1 / 4 上羽 幹夫会員(享年89歳) ご逝去

隊友会会員として長年のご理解ご協力有難うございました  
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします <支部会員一同>

## 令和4年度年会費等の納入について

隊友会の会務運営上大切な資金源となる年会費等(年会費または会運営協力費)納入の時期になりました。同封の振込用紙で3月末までの納入について、ご理解ご協力をお願い致します。 <支部事務局>



<鷹の島弁財天の  
主(あるじ)なき手水鉢>

## 雑想「昆虫食時代」って本当の話？

終戦直後、東北の片田舎の小学校低学年の頃、と言うと年の頃が知れてしまいますが、全校児童が田んぼの農作業に駆り出されたことが何回かありました。と言っても田植えとか稲刈りではなく、稲作の天敵イナゴを捕らえる作業ですが、当時は農業もなかった時代、網も道具もなしで手づかみで一升ビンが一杯になるほど捕れたのです。収穫したイナゴは佃煮に加工され、後日、児童たちに勤勞の報酬として配分されたことは言うまでもありません。極度の食糧難に喘いだ時代のこと、醤油のしみ込んだほのかな風味、食感は今でも忘れることができます。その後イナゴの佃煮にお目にかかったことはありませんが、聞くところでは日本では古くから広く全国各地でイナゴやバッタは食用に供されてきたと言うことです。稲作によって育まれた日本の食文化のひとつと言うところでしょうか。

諸外国に目を転じてみますとトカゲ、カマキリ、ナメクジ、変わり種として中国武漢の蝙蝠など、時代や国、民族、地域等の違いはありますが、世界では約1、900種類の昆虫(爬虫類ほか含む)が食用に供されているとか。

最近、館山では、有害鳥獣として捕獲されたイノシシやシカを解体して飲食店などに販売する加工処理施設ジビエ・センターがオープンし、地場産ジビエのブランド化に向けた取り組みが行われております。昆虫ではありませんが、毎年、千葉県では駆除された2千数百頭のイノシシやシカが地中に埋められているのです。これらの利活用、地域産業の振興の面でも大いに推奨されるべきことと思います。

さて本題はグルメとかジビエではなく、“人類が生存するため”の食糧の確保の問題なのです。

2013年に国連の食糧農業機構(FAO)が、世界の食糧問題の解決策として「昆虫食の推奨」を提起しております。その背景にあるのは人口問題で、現在75億人の世界人口が2050年には100億人に達すると見られています。そして国連が最も危惧しているのは「タンパク源の不足」ということで、人口の増加に加えて肉や魚を食材とする国が飛躍的に増加したこともあり、このままでは世界的な規模のタンパク源の不足をきたすことは必然であり、人類が生きてゆくため、地球の温暖化の防止とともに同じ次元での食糧問題の解決への努力が求められているゆえんです。

ここで注目されているのが「コオロギ」だそうです。と言っても野生のコオロギでは資源の枯渇、絶滅は目に見えているので、材料の安定供給のためには、養殖・畜産と言いますか、食用コオロギの飼育、増産が必要になってくるのです。コオロギに白羽の矢がたてられた理由を簡単にまとめてみましょう。

○生産コストが安い・・・飼育のための施設、面積、期間等の点

○「丸ごと食べられる」・・・タンパク質、ビタミン、ミネラルが豊富(栄養バランスが良好)

○環境にやさしい・・・肉・魚に比べ排出物等が少ない(温室効果ガスの排出が少ない)

肉や魚に代わっていずれはコオロギが食の主役となる日も決して遠い先のことではないような気がするのです。

何かと話題の多い中国ですが、最近、テレビ番組などの「大食いコンテスト」を禁止し、食堂などでの食べ残しを禁じ、違反者を厳重に処罰する法律を定め施行したのも、来るべき食糧危機に備え、この分野でのイニシアチブを取ろうとする意図が「見え見え」のような気がしてならないのです。 <<匿名、80歳代の会員、海>>

## 鷹の島弁財天・狛犬(ごまいぬ)に刻まれた海軍士官の名

毎年大晦日には、鷹の島弁財天境内の一角に建てられている旧海軍州ノ空航空隊(「州ノ空」)の予備学生戦没者慰霊碑に花一輪を供えるようにしている。平成2年に州ノ空出身の兵器整備予備学生によって建立され、ほとんどの会員が鬼籍に入った現在、訪れる人もなければ慰霊碑の存在すら知る人も少ない。州ノ空のことを調べ、当時の状況の一端を知る者としてせめてもの慰霊顕彰の気持ちからであろう。帰りがたらに何気なく神社参道の狛犬の裏側を覗いてみた。銘板には、「昭和11年9月23日 海軍大尉〇〇〇〇母▽▽」の文字が刻まれ、姓名までははっきりと読み取ることができた。なぜ鷹の島神社の狛犬に海軍士官の名が?、という疑問が出てくるであろう。この時期は鷹の島は全面的に部外者の立ち入りできなかったはずである。そこには「戦争とともに歩んだ」館山航空隊15年史の中の”知られざるひとコマ”が絡んでいるのである。

### 鷹の島をめぐる状況の変化・館空航空神社の建立

以前紹介したことがあるが、昭和5年、館山航空隊の開隊に際して、県知事からの強い要請により鷹の島の厳島神社(現在の「弁財天」)は、航空隊の敷地の中に「飛び地」の形でそのまま存続することになった。しかしながら鷹の島に弾薬庫や燃料施設の整備が進むにつれ、保全の見地から厳島神社の移転の要請が出され、昭和9年には神社の祭神は市内の北下台に移され、神社用地も海軍に管理替えされて部外者の立ち入りもできなくなった。さらに昭和10年には館空司令から、廃屋となった神社の社殿を修理して「館空航空神社」を建立する上申が出された。その背景には、中国大陸をめぐる情勢の悪化とともに機種別実用機搭乗員の教育訓練も次第に激しさを増し、訓練中の殉職者が続出した。ちなみに海軍航空本部の事故統計によれば、昭和9年度の海軍の航空事故が170件(ただし大事故)、殉職者46名(うち館空27件、7名)という途方もない数字が上げられている。「飛行機のイラストが彫られた手水鉢(写真)」の側面に刻まれた「昭和10年6月22日」は、横須賀鎮守府参謀長から航空神社建立許可の内示があった日付であり、紛れもなく館空航空神社の調度品として詠えられたものである。

### 主(あるじ)を失った手水鉢と狛犬に思う

冒頭で紹介した狛犬と銘板に刻まれた海軍大尉の名は、操縦教育中の不慮の事故で殉職した我が子を不憫に思った母親が、秋分の日に追悼とともに航空安全を祈願して航空神社に狛犬を寄進(奉納)したものであろうことは容易に想像が付く。

終戦とともに航空神社は消滅し、訓練殉職者の名も慰霊の祭事も行われることもなくなった。終戦までこの地(に限らず全国的に)で訓練中航空事故で亡くなった殉職者は計り知れない数に上ったであろうことは想像に難くない。

南房総の大日山山中の「海軍機遭難の碑」は、開戦の年の昭和16年6月、昼夜を分かたぬ激しい訓練中に遭難した海軍機(旧軍の資料で調べたところ館空所属の艦上攻撃機と判明)のもので、事故翌年の春分の日地元増間村の青年団、婦人会の篤志で建てられた。碑に刻まれた3名の搭乗員の階級氏名はもとより遭難事故については知る人ぞ知るで、慰霊碑の存在すら知る人は希少であろう。

訓練中の殉職者が英霊として戦死者名簿に名を連ねることは決してない。今となっては殉職者の全容を把握することは到底不可能であるが、“残された形あるもの”についてその由緒なりいきさつを知るとともに広く多くの人々に知ってもらおうことが、せめてもの慰霊顕彰になるのではなかろうか。主(あるじ)を失った手水鉢、狛犬のままでは殉職者も浮かばれないであろう。

<<自称地域史探索マニア その33>>